



二月次祭 講話 抜粋

一月二十六日にとめられた教祖百四十年祭は、天理時報に述べ十二万人が参拝をされたと記してありました。祝梅分教会からは、会長夫妻、梅かなめ布教所長親子、梅伊達会長夫妻、八十梅分教会長さんが参拝をいたしました。皆様には、年内におどばがえりをしていただければと思います。また、教祖百四十年祭の記念として真柱様より頂戴した色紙は、神殿に飾りいつでも見れるようにしたいと思います。

この二月は、三日に高橋恒二代会長がお出直しになった月です。来年は五十年祭の年になるのかなと思えます。また、十八日は、明治四十四年に祝梅宣教所が設立をされた月でも

あります。

当時の初代会長夫妻や信者さん方の思いは忘れていけないと思いますが、想像するにつれ、当時のおどばがえりや兵神大教会の参拝など多くの苦勞をされたおかげで今日があるというのは、紛れもない事実だと思えます。祖霊様として私たちを見守ってくださいることにも感謝をいたします。

教祖百四十年祭を終えましたが、これからは

「教祖のひながたを定規として喜び心で通ろう」を方針にしたいと思っています。

・ 私達の信仰を通して匂いや仕事、言葉を漂わせる事

・ 敷居の低い教会 誰でもお参りに来れる場

発行所
天理教祝梅分教会
千歳市祝梅 598
☎0123-29-2055
復刊第五十九号

・ 地域に役立つ教会 古切手
リングプル ペットボトルキャップを集めること
など変わらずつとめてまいりましょう。
なお、二月二十七日から本部神殿奉仕当番としてつとめます。

皆さんの祈願してくださるお願いカードを持参し、結界内で祈願をさせていただきます。
三月は大教会長様にご参拝をお願いしています。
来月もよろしくお願い致します。

全教一斉ひのきしんデー
4月29日(水・祭)
全国で開催されますので「教区支部情報ネット」で会場をお調べください。



第四十四回若人会総会のご案内

立教百八十九年(令和八年)三月二十一日(土)霊祭の後、つとめます。霊祭は、九時三十分よりつとめます。祭儀式のみで、その後、総会となります。

○翌日の三月二十二日(日)は夕張団總會が大教会で開催されます。

インタビュー

今回は、二月におぢばに帰られ、おさづけを拝戴された立石航大さんと、お母さんの恵美さんにお話をお伺いします。

○お母さんと航大くん、二人でのおぢば帰りは、いかがでしたか？

恵美―留守番の家族には不自由な思いをさせてしまいました。航大は高校、大学と家を離れていた。今までは教会の団参やごどもおぢば帰りに、何十人もの方々と一緒に…。それはそれで本当に楽しくて、思い出深い「おぢば帰り」でしたが、今回は時間に余裕があつて、自分が行きたい所に自由に行けた事がとても新鮮でした。

普段、慌ただしく過ごしているの、ゆつくりと、いろんな事を思い出しながら考える事が出来る、貴重な時間でした。

「てついでに百二十年祭の時、一歳くらいの航大を連れておぢば帰りましたな…。それがいつの間にか二十

歳になったんだなあ…」とか、「こどもおぢば帰りや大教会の鼓笛、祝梅のお泊まり会では、随分とみなさんにお世話になったな…。それが、こうしておさづけも拝戴出来るようになったんだな…」とか…。

航大―今年一月には成人式があつて、三月には二年制の大学を卒業するというこの時期におぢばに帰つて「ようばく」になることが出来てありがたいたいことだなあ…と思つていきます。両親やお世話になつた方達に感謝しかありません。

でも、別席、頑張つて聞かせてもらおうと思つたけど、寝てしまうことが多くて…。その話をしたら詰所の先生が「魂で聞かせてもらったらいいなだよ」と言つて慰めてくださつて、ちよつとホツとしました。

「ただ、別席の中のお話で納得いかない所があつて…。教祖が預かつた子供の命を助けるために、自分の子供二人の命を差し上げた事は、どうにも理解できなかった。それから教祖が十八回も投獄されたと言つけど、教祖はいったい何をしたんだろう…?」と思ひました。

○なるほど…。本とか読んでみるのはどうでしょうか。特に『劇画教祖物語』がお薦めです。漫画になつてるので、子供も大人も、とてもわかりやすいので、ぜひ読んでみてください。

「これからも、そんなふう」に「どうしてかな?」と思う気持ちをお大切にしたいと思ひます。

それに、航大くんが教祖が預かり子の命を助けるために、ご自分のお子様二人の命を差し上げた話を聞いて、なぜなんだろう…?と感じるのは、きつと、お母さんが航大くんをどれほど大切に思つているかが伝わっているからですね。

恵美さんのお母さんも愛情深い方でしたね。恵美さんがちよつと今の航大くんくらいの時、出直されたのではなかつたですか?」

恵美―はい、二十一歳の時でした。母には花嫁姿も見てもらいたかつたし、孫の顔も見せてあげたかつた…。

今回のおぢば帰りで三十年ぶりに修養科の時の思い出の場所にも

行つてみました。そこを歩いてみると、亡くなった母と一緒に修養科に入ったときの思い出が甦り、胸がいつぱいになりました。当時、母は癌の治療中で、修養科に入る時にはすっかり痩せてしまつていて、でもお腹は腹水が溜まつて大きく膨らんでいて歩くのがやつとの状態でした。

それが三ヶ月目には一緒に修養科に入つていた、おばあさんの車椅子を押してあげられるほど元気になりました。食欲もなかつたのに「三木の母ちゃんよく食うな」と言われるほど食べられるようになったのです。それなのに家に帰つて来たら、また病状が悪化して出直すことになってしまいました。母の出直しにも、きつと、何か意味があると思つていましたが、やつぱり、もう少し生きていてくれたら嬉しかったですね。

母が出直す前日、私は母の病院へ仕事の帰りに行きました。次の日の朝、出直したので、この日が母と最後に会つたことになるのですが、その日は教会で雅楽練習会がある日、当時は私も練習会に行つて

いたので、病院に着いた時、会える時間が十分もなかったのです。母はとても苦しそうに見えたので行くべきか悩みました。なので母に聞いてみたのです。「ここにいますと教会へ行くのと、どっちがいい？」と。すると母は「教会」と一言、言いました。それで私は雅楽練習会へ行つて、それが最後となりました。だから私は、それから「自分の都合より教会へ」と言う思いが強くなりました。それが母が残してくれた言葉だからです。

そして、葬儀の時、前会長様は「自分たちの幸せな姿を見せることが御霊様への最大の供養だ」とおっしゃいました。だから幸せになることと、教会へ運ぶことが母が一番喜びることだと私は思っています。

○お母さんが出直された後も、ずっと、教会に運んで来てくださったっていましたね。そして、お母さんのお名前で徳積みされていましたよね。

恵美ー前会長様が、母が入院して、すぐの頃、小さな袋に「つなぎ」と

書いて毎日お供えすることを教えてくださいました。それをずっと続けていきましたが、出直した時に「つなぎ」が終わってしまう事に「これでもいいのか？」と言う思いがありました。それで、今度、生まれ変わった時は子供の成長を見届け、孫にも会って、幸せな時を過ごす人生であつてほしいと願って「徳づみ、故三木スエ子」と書いて、月次祭にお供えさせていただいていました。

○お母さんはいつでも、恵美さんを見守ってくださっていると、思います。そして、恵美さん家族がみんな揃って教会に来てくださったって姿を、きつと喜んでくださっていますね。

恵美ーはい、そう思います。でも、航大が生まれたばかりの頃は、教会へ行つても「ひのきしん出来なく、申し訳ないなあ」と思っていました。そんなこと一言も言っていないのに前奥様が私に「めぐちゃん、ひのきしん出来ないなあと思つて、遠慮して教会に来ないのはダメだよ。教会に来ることによって

子供に徳がつくんだから。」と、おっしゃいました。それから航大が小さくても、やっぱり教会へ行こうと思つたんです。

もう母がいらないから、私を叱ってくれる人はいないんですね。でも教会へ行くとみんながいろいろ教えてくれますし、子供達にもダメなものダメと叱ってくれます。航大が小さい時、前会長さんによく叱られていました。前会長さんは航大の為にという思いで叱ってくださつたので、その叱つて下さるのがとてもありがたいと思つていました。私にとっては、教会は一つの大きな家族なんです。

○そんな風に言ってくれたら、嬉しいです。ありがとうございませう。航大くんの事は教会みんなが気にかけていましたね。

航大くんの事で特に忘れられない出来事があります。初めて教会の夏季練成会でお泊まり出来た時のこと「今年こそはお友達と一緒に泊りするぞー」と、本人もスタッフも頑張ってくれていました。でも、航大くんが「やっぱりダメ…家

に帰る」と言つて聞かないので、私もあきらめて家まで送つて行く事にしました。家に向かつて二人で歩きながら何気なく「ごもおぢば帰り」の時の話をしていたら航大くんがふと立ち止まり、くるつと教会へ方向を変えて戻りはじめました。「教会に戻るのかい？」と私が聞くと、航大くんは「うん、私、その日、教会に戻つてお泊まりすることが出来たんですよ。」

恵美ーお泊まり会の後、航大に「どうして教会に戻る気持ちになつたのか」聞いてみると「ごもおぢば帰りの時に、母ちゃんが僕や弟達を連れて行つてくれて頑張つたな…だから自分も頑張ろうと思つた」と、言つたんです。

その年のごもおぢば帰りには、子供もまだ幼いので夫も一緒に参加するつもりでした。でも、その頃、教会から夫に「三日講習会」の受講のお話があつて…でも、二回もおぢば帰りの費用は出せないの、考えた末、夫には「三日講習会」に行つてもらつて、「ごもおぢば帰り」には三人の子供達を私一人

で連れて行こうと決めたんです。祝梅の教会のみんながサポートしてくれて本当に助かりました。

○「ごどもおぢば帰り」は夕張の団体と一緒に、みんなで協力するから、大丈夫…と思っていたら、親子だけで別の格安の飛行機を利用して、おぢばに帰ると聞いて、慌てて、同じ飛行機で行って貰える人探したんですよね。本当に一人で三人連れて行く覚悟だったんですものね。「母は強し」です。

恵美ーでも、そのお陰で親も子も一つ成長する事が出来たと思えます。親からなかなか離れられなかった航大が高校では親元離れて寮に入り、大学では一人暮らしをしていました。本人も頑張ったと思いますが、ごごに行っても人に恵まれ、そして守っていただいてきました。本当に親神様の「ご守護」だなあ…と感じるんです。

○子供や若い人達が育つ姿は、私達大人にも希望や勇気を与えてくれます。特に新しい「ようぼく」が

誕生した事は教会みんなの喜びです。ありがとうございます。最後にこれからの事、聞かせてもらえますか？

航大ー弟達が「僕たちのおぢば帰りいつだろう」って楽しみにしています。今年、今度は家族みんなでもう一度おぢばに帰らせていただきたいと思います。

それから、今回のおぢば帰りで、自分のおつとめ衣を購入しました。就職も千歳に決まったので、月次祭には新しいおつとめ衣を着て、おつとめを勤めさせていただきたいと思います。

○それは心強いです。これからの「ようぼく」としての成長を楽しみにしています。

高橋悟志

三月四日から八日まで

本部で開催された「学生生徒修養会・大学の部」にスタッフとして参加をされました。

お疲れ様でした！

『年祭とは』

○先日、切ない願いをこの世に残し

五十五歳で逝った婦人の一年祭をつとめた。

○年祭とは、故人が生前中

恩を受けた人々をお招きし、故人にかわって家族の人々が恩を報じることである。

○また年祭の供養とは

故人の好物を霊前に供えるだけでなく家族の人々が互いに助け合い、支え合って築いた今の幸福な生活を、霊に報告し、霊に喜んで頂くことである。

○家族や身内の者が反目して

霊を悲しめることがあってはならない。

